形削盤　1863年，オランダ製　一台

【所　在　地】鹿児島市吉野町 9698 - 1　尚古集成館
【種　　別】国指定有形文化財（歴史資料）
【指定年月日】平成 12 年６月 27 日

形削盤（shaper）は，刃物受けに取り付けた刃物を水平に動かして，テーブル等に固定した金属部品を切削し，平面形状を加工する工作機械である。この形削盤は，1863 年にオランダのフェィエノールトにあったオランダ蒸気船会社（Netherlandsche Stoom Boot Maatschappij）で製造されたもので，大正４（1915）年まで集成館で使用されていた。機械の側面には「N.S.B.M. FYENOORD 1863」と記した銘板が取り付けられている。

この形削盤がいつ集成館に導入されたか定かではないが，文久元（1861）年，長崎製鉄所でオランダ人技師の指導を受けた鹿児島藩の技術者竹下清右衛門が，スティームハンマーなどの工作機械をオランダから購入するよう藩に要求し，翌文久２年，幕府の遣欧使節団の一員として渡欧した寺島宗則が，元長崎製鉄所の技師ハルデスに接触して工作機械の購入を依頼しているので，この時輸入されたと思われる。なお，長崎製鉄所でもオランダ蒸気船会社製の機械が使用されており，1857 年製の竪削盤（重文）が現存する。東京の国立科学博物館にも，集成館旧蔵で，この形削盤と同じ銘板が付いた竪削盤（重文）がある。

幕末期に輸入された工作機械はもともと数が少なく，しかもその大部分が設備更新等で失われている。本機械は遺された数少ない機械の一つで，わが国の工業史上貴重な資料である。